

京都府立医科大学の「今と未来」を伝える広報誌

The KPUM TIMES

COMMUNICATION MAGAZINE

Renewed

vol. 01
September 2024

京都府立医科大学の新たなあゆみ

- 特集 1 | 産学公連携機構
K-MICSプラットフォームを創設!
- 特集 2 | 北部キャンパス地域医学コース開講
- 特集 3 | 広小路キャンパス活性化プロジェクト



京都府公立大学法人
京都府立医科大学
KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY OF MEDICINE



大学本部棟 2階

昭和3年に建設された本部棟。2階の階段ホール先には大学の歴史と革新が織り交ざり、重厚感が漂う空間が広がっています。

CONTENTS

03 学長挨拶

特集1

06 産学公連携機構

K-MICSプラットフォームを創設!

特集2

08 北部キャンパス「地域医学コース」開講

特集3

10 広小路キャンパス活性化プロジェクト

11 Topics1 研究紹介

基礎研究

座りすぎに注意!

1日7時間以上座っていると乳がん罹患リスクが上昇

地域保健医療疫学 富田客員講師

臨床研究

超音波画像を用いた人工知能に基づく野球肘の
コンピュータ診断支援システム

運動器機能再生外科学 高辻 大学院生

木田 学内講師

12 Topics2

看護学科

オーストラリア研修2023

13 教授紹介

地域保健医療疫学 高嶋教授

小児外科学 小野教授

物質生物基礎科学 高西教授

基礎看護学領域 内海教授

看護倫理学・管理学領域 宮田教授

心臓血管外科学 小田教授

16 大学、附属病院からのお知らせ

世界トップレベルの 医学を地域へ



京都府立医科大学学長

夜久均

2023年4月に第33代目の学長を拝命しました。

就任早々に大学の運営理念を設定致しました。京都府立医大は明治5年の創立以来150年の歴史を誇り、その建学の精神は「世界トップレベルの医学を地域へ」という大学の理念に受け継がれています。これに基づき、二つの大学像の実現を大学運営理念と致しました。一つは医学の分野で世界に伍する研究大学であること、もう一つは大学のステークホルダーの期待に応える地域の拠点大学であることです。その実現のために昨年度から今年度にかけての主な取り組みを示します。

2023年度を振り返って



1) 京都府立医科大学産学公連携機構 (K-MICS) の設立：

現在、日本の大学を取り巻く環境は非常に厳しくなっています。一つは18歳人口の著しい減少という現実があります。またもう一つは日本の研究力の低下です。このような現状の中、我々の目指すところはあくまでも研究大学ですので、研究力をさらに強化し、加速するべくK-MICSを設立いたしました。京都企業、他大学と包括連携協定を締結し、共同研究だけではなく、シーズ/ニーズのマッチングの仕組み作り、ならびに人材育成を包括的に行っていくための機構です。そのための重要な役割を果たすのが覚生塾という機能であり、去る6月にはそのkick-off meetingを開催いたしました。今後本格的な活動を推進していきたいと思えます。

2) 北部キャンパスの設置：

今年の4月に北部医療センターに北部キャンパスを設置し、大学院地域医学コースを設置しました。この目的は、地域医療に従事する若手医師の医師としてのキャリアパスの見える化、そして地域課題を地域のフィールドで解決し論文にするという大学の研究力の向上、言うなれば北部の“知の拠点化”です。地域枠や自治医大出身者は義務年限内で社会人大学院生として臨床と研究に従事し、博士号を取得できる制度です。義務年限が終了すればすぐに海外留学等のキャリア形成の次のステップに羽ばたけるという、アカデミアの立場としての地域の魅力化に繋がるかと思えます。

3) 広小路キャンパス活性化プロジェクト：

広小路キャンパスとは河原町通りと御所で挟まれた広小路に面したキャンパスで、看護学舎と図書館があります。昨年度から広小路キャンパスの活性化プロジェクトを開始しました。その野外スペースにテーブル/ベンチを設置し、キッチンカーの導入等、教職員・学生が快適に過ごせる試みをしています。また電動アシスト自転車のポートを設置し、一般の人でも使用可能となっています。

4) ドナルド・マクドナルド・ハウス京都(京都ハウス) 準備委員会設立：

マクドナルド財団が世界展開している事業の一つとして、入院中の病気のお子様を抱えるご家族の宿泊施設の設置を行っています。日本でも既に13施設があり京都ハウスが14施設目となります。京都大学病院と府立医大附属病院で計画を進めてきましたが、河原町通今出川の東本願寺系の廃寺であった旧了徳寺の土地を使わせていただくことが決まり、今年2月に建設資金確保のための準備委員会が立ち上がりました。今年度中に資金を確保し、2026年度の完成を目指します。

5) 大学施設整備実施計画の完成：

長年の懸案である施設整備計画ですが、現在のE棟を解体、拡大新築する実施計画の策定を行いました。ここでは附属病院の中核機能である高度急性期・先進医療を遂行するため、手術室機能、重症系病室機能の拡充を行い、また政策医療を担う機能として、感染症即応病床、救命救急センターを設置します。次のステップとしては基本設計になりますが、これは京都府と調整しながら次の目標となります。

府立医大の展望・これから

今年度から来年度に向けての事業計画・目標を提示したいと思います。

1) K-MICSの本格稼働：

我々の研究力をさらに強化し、加速するべく設立したK-MICSを今年度から来年度にかけては実働に繋げていきたいと思っています。特に研究支援体制の充実が研究成果を社会に実装していくための重要な基盤となりますので、人材の確保ならびに育成に努めていきたいと思っています。またK-MICSの重要な機能の一つである覚生塾において、包括連携企業とのシーズとニーズのマッチングイベント、テーマ設定コンペ、知財関係・アントレプレナー等の知識共有のための連携講座等を企画していきます。もちろんこの覚生塾は北部キャンパスの大学院生も参画することが期待され、地域における課題解決のための研究、社会実装、人材育成に繋げることもその目的としています。

K-MICSが研究成果を社会実装していくための非常に大きなプロモーターになり、それを通じて継続的に社会貢献できることを期待します。さらに社会の現場からの課題が基礎研究にreverse translationされ、生命現象の原理解明を目的とする生命基礎科学と社会実装を目的とする応用科学のエコシステムが機能することを期待します。そのことによって、本学が地域中核の研究大学であることに繋がり、そしてステークホルダーの信頼獲得、大学のブランド力の向上に寄与すると考えます。大学が成長を続けていくためにも今年度から来年度に向けてその一歩を踏み出して参ります。

2) 教育改革：

大学の大きな目標と課題の一つは教育改革です。2022年にモデル・コアカリキュラムが改定され、また昨年2023年には臨床実習前のCBT/OSCEが公的化されました。それらに基づいて、見学型臨床実習ではなく診療参加型臨床実習を行うことが要求されています。これは臨床実習を行う学生がStudent Doctorとして医療行為を行うことが法的にも認められたことに基づき、臨床の見学ではなく医療チームの一員として行動することが要求されます。また内科、外科、小児科、産婦人科、精神科、総合診療科、救急科においては連続3週間の実習が義務付けられ、そのうちの一つ以上の科で全人的な診療能力・態度を涵養する目的で連続4週以上の配置が求められます。今年から医師の働き方型改革が始まっている中で、各診療科においては益々教育の負荷がかかるという



こととなりますが、関係病院の協力も得て、診療参加型臨床実習のプログラム改変を今年度～来年度にかけて行い、学部学生ならびに研修医の臨床能力の向上を目指していきます。くしくも今年度は大学機関別認証評価、また来年度は医学教育分野別評価を受審する年回りになっています。これらの準備をうまく利用しながら教育改革を大学を上げて遂行していきたいと思っています。

3) 図書館ラーニングコモンズの設立：

昨年からの広小路キャンパス活性化プロジェクトの中で、図書館を整備し、ラーニングコモンズの設置を進めて参ります。これは学生が少人数でディスカッションできるスペースを想定しており、また同時に図書館エリアで一般の方も利用できるカフェのオープンも予定しております。このような取り組みによって、多くの学生が有効に使用できる図書館作り、また一般の皆様にも開かれた身近な大学作りを目指していきます。

特集1 | 産学公連携機構 K-MICSプラットフォームを創設!

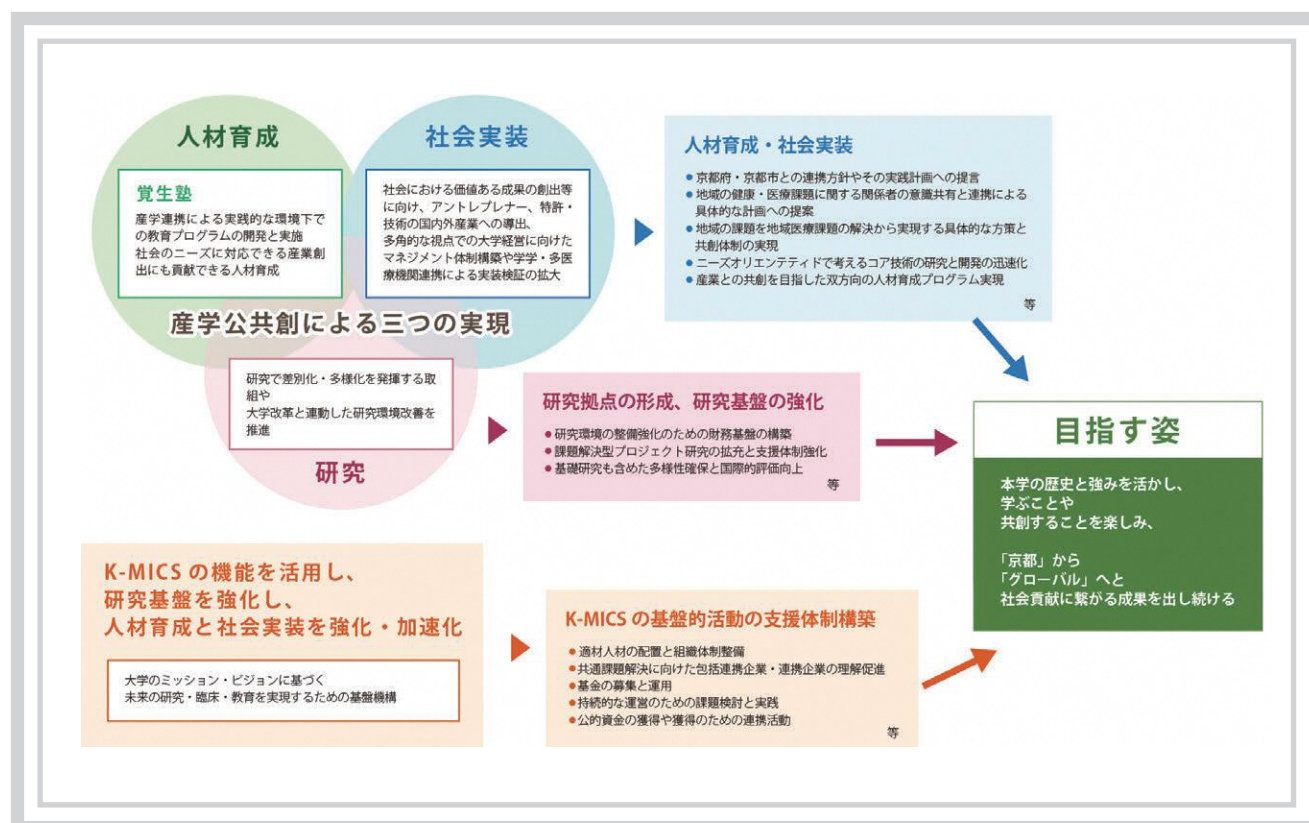


ケー ミクス K-MICSとは?

KPUM Medical Innovation Core for Society(通称「K-MICS」)とは、**産学公連携事業の適正かつ公正な推進と加速化**を担う大学の組織です。

大学は基礎研究、臨床研究によって多様なシーズ(一人ひとりの研究力)を幅広い分野で持っています。シーズを育むためには研究環境の整備が必要であり、研究環境の整備を行うことで研究力が向上し、研究力を支える人材育成に繋がります。

K-MICSは、これまで以上に**研究者と産学公間の繋がりや研究環境の整備、人材育成**を強化し、そして、**研究成果を社会に還元していく社会実装**に向けて支援していきます。



K-MICSの仕組み

K-MICSの展望

京都府立医科大学 副学長(研究・未来人材育成担当)
八木田 和弘

18歳人口の急激な減少が予測される我が国では、中教審からは大学の規模縮小を促す答申も出される中、「国際卓越大学」と「地域中核・特色ある研究大学」を選定し、それ以外の大学はダウンサイジングが避け難い流れとなっています。このような状況下において本学は、研究力によって社会から求められる研究大学となることを目指そうとしています。本学の場合、研究力とは、最先端の治療法や検査法の研究開発、疾患研究による病態解明、そして生命原理の理解から導かれる健康医学や未病制御、疫学やデータサイエンス、などの研究成果がその基盤となりま

す。しかし、それだけでは「研究力」として十分ではありません。その成果を社会に届けてこそ、本当に社会から求められる大学となり得ます。研究大学には社会実装にも責任を持って取り組む姿勢と機能が必須であり、これを担う大学組織としてK-MICSが設立されました。社会実装に不可欠な産学連携研究、社会課題に取り組むための自治体や官公庁との連携活動、そしてさまざまな背景を持つステークホルダーと協働できる越境的研究人材の育成、などを推進するとともに、研究活動の基盤となる研究環境整備にも責任を持つ、包括的な研究支援組織となります。特に



人材育成については「覚生塾」と銘打って様々な講座やイベントが計画されています。現在K-MICSは、本年度中の本格稼働に向け組織体制作りを急ピッチで進めています。京都に、そして日本に、「京都府立医大があって良かった」と多くの人々に言ってもらえるような未来を目指しています。

K-MICS「覚生塾」キックオフ 特別講座を開催しました

「K-MICS」ではイノベティブな研究人材の育成活動を担う「覚生塾」を立ち上げ、2024年6月26日(水)、京都府立医科大学 図書館ホールにおいて、「K-MICS『覚生塾』キックオフ特別講座」を大学院生対象に開催しました。

世界的な人類学者である山極壽一氏、元参議院議員でバイオテック、グローバルファーマ取締役を歴任された江端貴子氏、本学 感覚器未来医療学 教授 木下茂氏を迎え、「京都府立医科大学から巻き起こす医療イノ

ベーションとK-MICSの役割と期待」をテーマに『未来の医学の創造と地域社会への貢献』を京都から実現するために、未来の医療イノベーションを担う若手医師・若手研究者をどのように育て、支援していくか語り合いました。最後の総合討論は教員や関係者だけでなく、学生も参加し、様々な視点から産学公連携について熱く意見交換を行いました。



Information

●K-MICSについて
詳しくはこちら



●問合せ先はこちら

京都府立医科大学 産学公連携機構K-MICS事務局(情報・研究支援課)

E-mail:k-mics@koto.kpu-m.ac.jp

特集2 | 北部キャンパス「地域医学コース」開講

北部キャンパス“知の拠点”の理念とコンセプト

京都府立医科大学 副学長(研究・未来人材育成担当) 八木田 和弘



北部キャンパス「知の拠点化」は、①北部医療センターの大学機能強化、②地域卒卒業生や自治医大卒業生のアカデミックキャリアを支援する社会人大学院コース、③京都府北部地域の医療機関や自治体と連携したフィールド研究のHub機能強化、の三つの柱によって成り立っている本学の中核的事業の一つです。北部医療センターの大学機能強化については、2023年1月に総合診療・地域医療学講座に四方教授が着任されたことに始まります。さらに、北部キャンパスに大学院地域医学コースを新設したことが非常に大きな契機となりました。そもそも、大学機能とは「教育と研究」であり、その両方が実質的に展開する環境が生まれたわけです。しかし、まだ十分とはいえず、現在も急ピッチで体制の整備強化が進められています。大学院北部キャンパス地域医学コースについては、疫学研究や臨床研究を中心としたテーマで研究指導を受けながら義務年限内に博士号を取得

できる社会人大学院コースです。もちろん、指導体制が整っていれば研究領域やテーマは自由です。大切なのは、これまで制約が多かった地域卒卒業生や自治医大卒業生の学位取得に道を開いたという点です。2024年4月、5名の非常に優秀な医師たちが大学院に入学したことは新聞等でも取り上げられ、社会の注目の高さが示されました。ただ、大切なのはこれからです。本年8月には、北部キャンパスに新たに二つの大学院講座(連携講座)が新設され、大学院生のみならず北部キャンパスにおける研究指導体制は着実に強化されています。今後、地域フィールドや自治体との連携により、疫学研究や臨床研究のみならず地域社会に入り込みながら様々な領域で医学・医療の課題を掘り取り、研究を通じた社会課題の解決を志向する「総合知の拠点」として発展することを強く期待しています。

教授紹介 | 世界トップレベルの医学は地域から

2024年春、大学院北部キャンパス地域医学コースに5名の大学院生が入学しました。各人が目指す専門性やおかれた環境は全く異なります。しかし、京都府北部の医療機関に勤務しながら、研究経験ゼロから医学博士を取得してしまう、という溢れんばかりのバイタリティがあることは共通しています。

- 専門医取得の修練を積みながら先輩の指導を受け、大規模データベースを用いて治療のQI適性を検証する
- 育児をしながら臨床医として活躍し、患者を対象としたRCTを実施する
- 経験豊富な指導者とともに、遠隔地診断のディメンジョンを変えるAI診断のシステムを開発する
- 専門医取得の修練を積みながら、市町村レセプトデータを用いて住民の受療動向を分析する
- 臨床現場での実感をヒントに、住民の生活様式と医療コストとの関連性を分析する

大学院生が自ら提起した上記の研究課題は、日常の臨床から生じた素朴な疑問を起点としていて、その成果は地域の医療に還元することができるものです。そして、いずれも斬新で独創的であり世界に発信するにふさわしいテーマです。

北部キャンパス地域医学コースを選択したことが、皆さんの研究者としての大きな第一歩となり、無限の可能性を秘めたキャリアパスに繋がることを心の底から願っています。私たち教員にとって、探究心に満ちたキラキラと輝く瞳の大学院生に伴走できることは最高の喜びです。



▲地域医学コースのリサーチカンファレンスの様子。大学院生の勤務先からハイブリットで繋ぎ、研究テーマを発表されている様子。北部キャンパス(左上)から加藤キャンパス長と総合診療科の関本講師、中央に四方教授。



大学院医学研究科 総合医療・地域医療学
四方 哲 Satoru Shikata

[略歴]

- 1994年 自治医科大学卒業、京都府立医科大学附属病院(第二外科研修医)
- 1996年 久美浜町国保久美浜病院(外科医員)
- 1999年 京北町国保京北病院(外科医長)
- 2003年 京都大学医学部附属病院(総合診療科医員)
- 2004年 京都大学大学院医学研究科(臨床疫学研究生)
- 2005年 医療法人社団蘇生会総合病院(外科医長)
- 2012年 三重県立一志病院(総合診療科、病院長)
- 2021年 京都府山城広域振興局(山城北保健所長)
- 2023年 京都府立医科大学大学院医学研究科(総合医療・地域医療学教授)



北部キャンパス地域医学コースの

開講式を行いました

2024年4月13日(日)、北部医療センターにおいて北部キャンパス地域医学コース開講式を挙行了しました。開講式では夜久均学長から「地域課題は日本の課題であり、研究成果を全国、世界へ発信してほしい」と挨拶がありました。入学者5名を代表して、稲葉哲士さんは「地域医療に関する実践と研究を両立する先進的な場として北部キャンパスが設立されたことに、感銘を受けている。高齢化の進む北部地域だからこそ、現場で直面する課題に真摯に向き合うことで、先進的な研究を世界に向けて発信していけると確信している」と述べました。



message

加藤キャンパス長からメッセージ

京都府立医科大学北部キャンパス長
加藤 則人



大学院医学研究科の北部キャンパス地域医学コースでは、世界の多くの国々が直面する超少子高齢化に伴う「健康・医療」の問題に対する解決策の探求など、京都府北部地域をモデルとしてさまざまな医学的な課題について学術研究を行い、世界に発信することを目指しています。日々の診療で生まれた疑問や気づいた問題、あるいは今後直面するであろうと考えた様々な課題に対して、自ら研究することによって解決策を見いだすことは、

地域で診療に従事する医師だからこそ成し得る、とても貴重なものです。その研究から、これまでの医学の常識を変える、診療ガイドラインや教科書の記載を変える、医療のあり方や仕組みを変えるような成果が生まれ、世界中の人々の健康な暮らしに役立つことを期待しています。

また、医学科の学生が、地域の拠点病院の特長を活かした充実したプログラムによって幅広く奥深い学びを得ることを企図して、学生が主治医チームの一員と

して一人一人の患者さんの外来初診から入院、退院、さらには在宅医療まで、すべての治療経過に関わりながら学ぶ長期滞在型臨床実習を計画しています。医師、医学研究者としての多様なキャリア形成に貢献できるよう、北部キャンパスでの医学教育と研究の機能の拡大と強化を図っていきます。皆様とともに学ぶことを楽しみにしています。

特集3

広小路キャンパス 活性化プロジェクトの 紹介

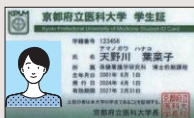
京都府立医科大学では、大学本来の目的である高等教育と学術研究活動を支える重要な学術情報基盤である「附属図書館」と看護学生の学び舎である「看護学学舎」がある「広小路キャンパス」について、その貴重な資源をより一層有効活用し、キャンパスを活性化することが、大学全体の活性化につながることから、2023年7月から「広小路キャンパス活性化プロジェクト」に取り組んでおります。今日まで様々な活動の取組状況と今後の計画を紹介いたします。

これまでの主な取組

- 電動キックボード等シェアリングサービスの常設ボード(10台)を設置。京都府内の大学初の取組です。



- 学生証ICカード化による図書館利用証の統合。大学構成員は、学生証ICカード、職員証ICカードで図書館利用申し込みなく利用が可能になりました。



- 学生等の憩い、学習できるスペースの創出として、昨年10月に屋外にテーブル・ベンチを配置。キッチンカーの食事にも学生等が利用中。



- 看護学学舎地階学生ホールのアメニティ向上として、壁塗り替え等の実施、ハイカウンター席及びビッグテーブルを新設。休み時間には学生で満員で好評。



- キッチンカーの導入。患者、学生等のアメニティ向上を図り昨年12月から広小路、河原町とともに配置。学生には割引制度で500円で提供。



- プロジェクト専用ホームページ「京都広小路通信」を新設。様々な人にインタビューし、X、Facebook等SNSで発信。



今後の計画

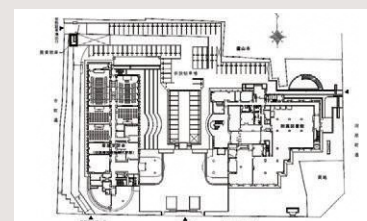
①附属図書館内に「ラーニングコモンズ」の新設

新たに学生の主体的な学習を支援したり、研究者がグループ討議等できる「ラーニングコモンズ」の設置を計画しています。情報通信環境を整備し、個人の自習に使うとともに、グループでのディスカッションを行う場としても活用でき、協調性やコミュニケーション能力を養う空間としても有効だと思われます。広小路キャンパスへの学生、研究者等の往来、活性化へと繋げてまいります。



②広小路キャンパスの全体的な「リニューアル」を計画

「附属図書館・合同講義棟」には、ラーニングコモンズや学生等が過ごしやすくするためのカフェの新設を、「看護学学舎」には雰囲気明るくするため壁紙等の全面改装やコンビニの新設を計画し、それぞれリニューアルすることを目指しています。図書館ホールの更なる利活用の拡大も検討しています。



現状、広小路キャンパスの中核は附属図書館ですが、本プロジェクトの狙いは決して図書館だけの活性化ではありません。広小路キャンパスの活性化＝学生だけでなく、一般の方にも開かれ、集い、喜ばれる空間、その実現により大学全体の活性化＝「高等教育」と「学術研究活動」の一層の充実を図り、その結果として、優秀な医師・看護師・研究者の更なる育成＝世界トップレベルの地域医療の実現、医療、福祉、予防を通じて地域・社会貢献を図るものです。

ぜひ、この「京都府立医科大学・広小路キャンパス活性化プロジェクト」へのご理解と、温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

クレジットカード等によるご寄附はこちらからお願いします。 >>



基礎研究

大学院医学研究科 地域保健医療疫学

客員講師 富田 仁美

座りすぎに注意！ 1日7時間以上座っていると乳がん罹患リスクが上昇

～1日7時間以上の座位時間では、運動を増やしても乳がん罹患リスクは低下しない～

乳がんは日本人女性で罹患率が最も高いがんです。がんは生活習慣、環境要因、遺伝子など、様々な原因が組み合わさることで発症しますが、35%ほどは生活習慣を改善することで予防できるといわれています。運動は乳がん罹患リスクを下げる効果があります。

長時間の座位行動は健康に悪影響を与え、WHOのガイドラインにおいても座位行動を減らすように推奨されています。座位行動とは覚醒している(眠っていない)時間で座っている、リクライニングしている、または寝転んでいる状態をさします。日本人の座位時間は世界で一番長く、中央値は1日7時間といわれています。

本研究では3.6万人を超える日本人女性を9.4年間(中央値)追跡したデータを用いて1日の座位時間と乳がん罹患の関係を分析しました。1日7時間以上座って過ごすと乳がんリスクが36%上昇することが分かりました。つまり1日の座位時間を7時間未満にすることが乳がん予防の一つとなると考えられます。また1日7時間以上の座位時間では、余暇の運動や1日の歩行時間が増えても乳がん罹患リスクは低下しませんでした。この結果は乳がん罹患において座位時間が運動よりも強い影響を与える要因である可能性を示しています。



臨床研究

大学院医学研究科 運動器機能再生外科学

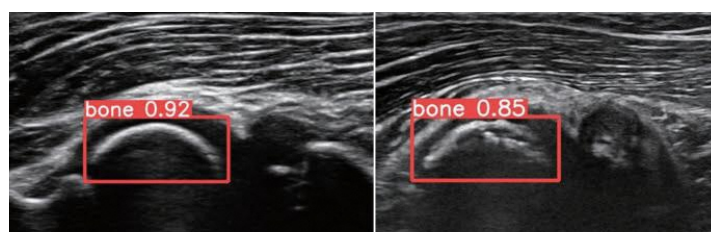
大学院生 高辻 謙太

学内講師 木田 圭重

超音波画像を用いた人工知能に基づく野球肘の
コンピュータ診断支援システム

成長期の小中高生に多い「野球肘」のひとつに、投球動作の繰り返しが原因となる離断性骨軟骨炎(osteochondritis dissecans; OCD)があります。OCDは初期段階では無症状ですが、進行すると手術が必要となり選手生命にも影響を及ぼすため、早期発見が重要です。超音波検査は初期段階のOCDの発見に適していますが、病変の判断には専門的な技術と経験が必要です。そのため野球肘を専門とする医師でなくとも簡便に利用することができ、高い診断精度を有するOCDの超音波診断支援システムの開発が望まれています。そこで本研究では、超音波画像から肘関節の骨表面を自動検出し、その骨表面が健常あるいはOCDかを識別する人工知能による画像診断支援アルゴリズムを開発しました。骨表面の検出には、車や人物の自動検出にも使用される物体検出アルゴリズムYOLOを使用し、検出された骨表面が健常あるいはOCDの分類には、深層学習モデルVGG16を使用しました。この手法によりOCDの検出精度は最大97%と非常に高い数値を示しました。

今後、このアルゴリズムを用いたリアルタイム自動検出システム導入により、OCDの早期発見率の向上に繋がることが期待されます。



看護学科 オーストラリア研修2023

看護学科では2023年に夏休み大学合同企画としてオーストラリアでの10日間にわたる看護研修を初めて行いました。その様子をお届けします！

府立医大でのサポート(事前研修)

学生の声：夏期休暇中にJason先生による学生の希望日に合わせた英語のレッスンや、現地の滞在情報とミニレクチャーの機会を設けていただき安心して渡航することができました。



- 1 グリフィス大学看護学部ナースングラボ
- 2 グリフィス大学看護学部ナースングラボ
- 3 グリフィス大学の学生と交流の様子
- 4 Walk in Specialist Emergency Robina
- 5 Walk in Specialist Emergency Robina
- 6 現地の日本人看護師さんとの交流
- 7 Currumbin Wildlife Sanctuary
- 8 Currumbin Wildlife Sanctuary

看護学科オーストラリア研修2023を通して、海外の看護の現状や日本との制度、職場環境、教育の違いを学ぶことができました。「働く人たちの権利や心身を守る」「家族を大切に家族のために働く」という考えに基づくオーストラリアの看護は、看護師の仕事の分業化を徹底しているため看護師の負担が軽減されワークライフバランスのとれた働き方へとつながっていることを学びました。

残業をする際は、手当が手厚く、残業申請を避けるために仕事の少ない日には早く帰ることができ、これらのことに理解があるため時間を効率良く使いストレスフリーな労働環境が整っています。また、オーストラリアの病院には海外の看護師も多く働いていることから、文化の違いを理解できるようにカルチャー教育もされています。さらに、先住民の健康問題が深刻化していることから先住民を尊重したサポートもとられており、多様性を重要視した看護が提供されています。日本では、看護師は国家資格であり、一度取得すると働き続けられますが、オーストラリアは更新制で年に受けなければならない研修のノルマがあり、それを達成することで継続して看護師として働くことができます。看護師全員が最新の知識や技術を習得でき、看護の質が保つための制度であることを学びました。

オーストラリアはメディケアという制度があり、公立病院でのすべての治療診断、検査、手術が無償になるものがあります。しかし、公立病院で診察を受けるには救急時以外はGPという総合診療医を通さないと診てもらえず、日本のように直接専門医にかかることはできません。また、日本よりも病院数が少ないこともあり、患者目線に立つと日本の方が医療機関へかかりやすい体制が整っているように感じました。

オーストラリアの看護教育は、投薬の調整や量など医師の指示を待たずに患者の状態を把握し、自らの判断で責任を持って看護行為ができるようにリアルな状況を再現できる模型を使用し、臨床に近い形で学べる環境が整っており、魅力を感じました。

現地の日本人看護師さんとの交流会では、オーストラリアで看護をするにあたり実際に感じた良さやギャップ、大変なことなどを聞くことができました。学生交流では、学校生活やプライベートなどの過ごし方を英語で交流しました。他にも、GPや私立病院の役割など医療の実際を知ることができました。勉強だけでなく、動物園でコアラを抱っこしたりビーチやショッピング、ホストファミリーと休日を過ごしたりして観光も楽しみました。

現地の病院や医療を学び、異文化に触れ、刺激を得ることができたとても有意義な研修でした。

看護学科3年生 林 華穂さん

教授紹介



大学院医学研究科 地域保健医療疫学

高嶋 直敬 Naoyuki Takashima

略歴

神戸大学医学部を卒業後、淀川キリスト教病院で研修。滋賀医科大学医学部社会医学講座特任助教、助教、近畿大学医学部准教授をへて、2023年1月から本学地域保健医療疫学教授に就任。

座右の銘

A rolling stone gathers no moss

私は、これまで15年以上にわたり、滋賀県で地域に根差したコホート研究や循環器疾患発症登録などの疫学研究を行ってきました。このような疫学研究の多くは研究参加者の皆様をはじめ、地域の自治体や医療機関など多くの方々の協力を得て、何十年にもわたり調査を行い、成果を発信する非常に息の長い研究になります。

少子超高齢化社会の我が国において、健康寿命延伸は公衆衛生上の大きな課題の一つです。これまで行ってきた疫学研究に加えて京都府民の皆様のご協力を得て当教室で実施しているコホート研究を今後、発展させ、健康寿命延伸のためのエビデンスを創出していきます。

またこういった研究は長期間にわたり継続することで価値(エビデンスの信頼性)が向上する研究ですので、次の世代の健康課題解決に資する研究を新たに立ち上げるだけでなく、後進となる研究者、公衆衛生医師を育成しバトンを渡していくことも私に課せられた使命だと考えています。

教室内外の共同研究者とともに、研究の発展と後進の育成という二つの使命を果たし、京都府だけでなくわが国の健康課題の解決に努めていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



大学院医学研究科 小児外科学

小野 滋 Shigeru Ono

略歴

京都府立医科大学卒業後、小児外科医として研鑽を積み、1999年より本学小児外科学の教員を務め、2013年より自治医科大学小児外科学教授を経て、2023年1月から本学小児外科学教授に着任。

座右の銘

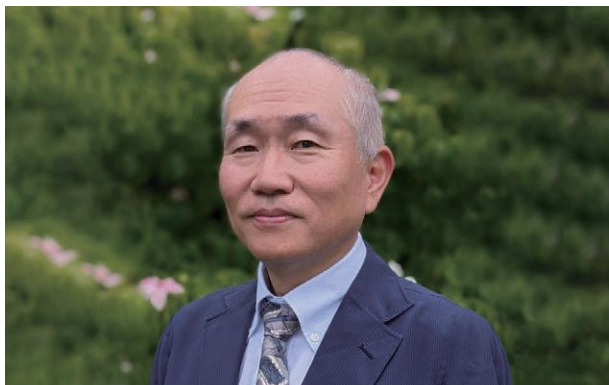
Priorityはこどもたちのために

「手術治療でこどもたちに80年の人生を」、「小児外科医はこどものGeneral surgeonである」、など小児外科を表す言葉はいろいろありますが、病と闘う目の小さな命にいかにも真剣に向き合い最善の治療を行うか、そして常にこどもの術後QOLを考え、手術以外の治療も含めて何がベストなのか想いを巡らせ、日々研鑽を積むのが小児外科医であります。小児外科がカバーする領域は広く、そして奥深いものであり、30年以上経った今も新鮮な気持ちでやりがいを持って臨床に向かうことができるのも小児外科の魅力であると確信しています。

小児外科医療は、小児外科だけでなく産科、産科、小児科、泌尿器科、小児心臓血管外科など関係各科との横断的連携を強化して、小児医療の安全性を担保しながら小児外科医療を行うことが大切です。究極のSpecialistである自負を持ち、こどもを中心とした全人的医療を遂行してまいります。

小児外科のアイデンティティをさらに高め、数だけでなく世界に通じる質の高い小児外科診療、小児外科手術を行うことと、Professionalとしての自覚と誇りを持ち、患児とその家族に寄り添う心を持った優秀な小児外科医を育てることに、これからも全力で取り組んでまいります。

教授紹介



大学院医学研究科 物質生物基礎科学

高西 陽一 Yoichi Takanishi

略歴

東京工業大学工学部卒。東京工業大学助教、京都大学理学部准教授を経て、2023年4月より本学大学院医学研究科 物質生命基礎科学教授に就任。

座右の銘

健康第一

物理学という医師を目指して入学した学生には関係のない学問の印象が強いと思いますが、医療装置の根本は物理法則に基づいており、正しく理解することで最大限利用できるはずですし、人の関節や筋肉の動き、体の支えを考える技術であるポディメカニクスも力学です。また何より論理的に考えるという物理的思考は、患者さんへ病状説明を行う上で、説得力を増す大事な能力となります。府立医大に移ってからは、その辺を意識して講義を行っているつもりです。専門はソフトマター実験物理学で、ソフトマターとは文字通り柔らかい物質、人間も典型的なソフトマターであり、その構造と物性を理解し新規機能発現を目指した研究を行っています。

座右の銘についてですが、全ては体が資本です。歳をとると若い時にはできた連日徹夜実験など、種々のことができなくなっていると日々感じます。そこで最近は体力の衰えを抑える心づもりもかねて、天気がよければ週末4~5kmは歩いて、見知らぬ商店街や史跡などを見つけるなどの散策を楽しんでいます。

また体だけではなく、こころの健康も大事です。なにかとストレスが多い現代社会ですが、学生の皆さんにはそうした状況に負けず、ストレス解消の術も見つけて充実した毎日を過ごしてもらいたいと思います。



大学院保健看護学研究科 基礎看護学領域

内海 桃絵 Momoe Utsumi

略歴

聖路加看護大学卒業。聖路加国際病院、日本看護協会勤務。大阪大学大学院にて博士(看護学)取得。京都大学大学院助教、講師、大阪大学大学院准教授を経て、2023年10月に本学基礎看護学領域教授に就任。

座右の銘

夢見て行い考えて祈る

基礎看護学領域は、看護の対象となる人の理解、看護の概念や役割、看護を展開するための基本的な技術など、看護学の導入となる科目を担当します。看護は身体・心理の両面にアプローチして人々の健康と生活を支援する奥が深い仕事です。私も看護師として、多くのかけがえのない経験をしました。看護職として、はじめの一步を踏み出す学生に看護の魅力を伝えていきたいと思っています。

私の主な研究テーマは、感染管理です。未だ収束していない新型コロナウイルスのパンデミックから、感染管理のあり方は大きく変わってきています。病院、施設、行政等が一体となって、感染症に強い地域をつくり、これからの新興・再興感染症の流行に備える必要があります。変化のスピードが増している現在、既存の概念に囚われない考え方や実行力が求められていると感じます。

今後は看護・医療、感染管理に関する新たな知見・価値を見出して地域に還元していく人材を育成したいと考えています。夢を描いて実行し、考え続ける姿勢を忘れずに、貢献していく所存です。



大学院保健看護学研究科 看護倫理学・管理学領域

宮田 千春 Chiharu Miyata

略歴

熊本県立大学大学院にて修士(アドミニストレーション)、エセックス大大学院(英国)にてInternational Healthcare Management(修士)、京都大学大学院にて博士(人間健康科学)を取得。防衛省看護官、京都大学大学院助教、九州大学大学院准教授、三重大学大学院准教授を経て2024年1月に本学医学部看護学科看護倫理・管理学教授に就任。

座右の銘

理論なき実践は盲目であり、 実践なき理論は空虚

ヘルスケア人材の不足は常態化しています。「看護倫理・管理学」領域では、「マネジメントの知識/スキルの獲得」と「プロフェッショナルリズムの育成」の側面から看護職の離職防止にアプローチしています。

看護職は、専門知識や理論に裏付けられた確固たる基盤と経験によって培われた洗練された技と知恵によるケア実践が求められます。看護マネジメントも然り、看護管理者の「マネジメント論」「組織論」「人的資源管理」等の理論的基盤とエビデンスに基づく効果的な部署運営、人材管理は離職防止に有効です。また、スタッフレベルでも、マネジメント諸理論を学ぶことにより組織社会化が促進され、セルフマネジメントスキルが向上し、人間関係や業務負荷による離職防止が期待できます。

さらに、学部生からの「キャリア教育」による「プロフェッショナルリズム育成」を推進しています。自らキャリアデザインを描き、看護師としての将来像を明確化させる。これが、働く/学ぶことへのモチベーション維持となり、キャリアプラトールによる離職を防止できる可能性があります。今後は、京都府内の看護職のマネジメント力の向上と人材確保に貢献していく所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。



大学院医学研究科 心臓血管外科学

小田 晋一郎 Shinichiro Oda

略歴

九州大学卒業後、心臓血管外科医として研鑽を積み、2022年から本学心臓血管外科学の教員を務めた。2024年3月から同学教授に就任。

座右の銘

志を立てて以て万事の源と為す

心臓血管外科は、命を預かる重要な分野であり、手術を通じて患者さんの命を救うことができます。その達成感は何にも代えがたいものです。一瞬の判断が生死を左右するため、手術をやり抜く覚悟が必要です。また、新しい治療法や手術手技が次々と開発され、常に学び続ける姿勢が求められます。チームで命を救い、医師としての成長と挑戦を続けることができるやりがいのある領域です。

医師としての志を成すためには、その志を支える環境が不可欠です。「好之者、能之者也」という言葉がありますが、好きで取り組むことは苦痛ではなく喜びとなり、その結果として高い技術や知識を身につけることができます。私は、そのような環境を作り出すことを重視しています。

私の目標は、エンパワーメントされた個々がチームを形成し、患者さんの求める医療を提供することです。医師やスタッフが社会に貢献できたと感じ、仕事で得た幸福感が人生を豊かにしていくことを大切にしています。個々の医師やスタッフが自らの能力を最大限に発揮し、患者さんに最高のケアを提供できる環境を整えることで、社会全体の健康にも貢献できると信じています。

ご寄附のお願い

一般寄附

本学では、広く本学の教育研究、診療環境の整備等を推進するため、また特定の事業をご指定いただくなど、法人(企業等)や個人の方から寄附金を受け入れております。

- お申込後、振込用紙によるお振込
- 詳細は、京都府立医科大学総務課までお問い合わせください。

創立 150 周年記念事業への寄附

2022年、本学は150周年を迎えました。150年の節目を超えて、次世代トレーニングセンターの整備や映画製作など記念事業について、引き続き大学を挙げて取り組んでおります。

- お申込後、指定口座にお振込
- 詳細は
<https://www.kpu-m.ac.jp/doc/about/150kifu.html>



上記の寄附金は、財務大臣が指定する寄附金(昭和40年大蔵省(財務省)告示第154号による指定)に該当するため、所得税法第78条第2項第2号及び法人税法第37条第3項第2号の規定により税制上の優遇措置を受けることが可能です。なお、京都府民、京都市民の方は、個人住民税(京都府民税、京都市民税)につきましても優遇措置を受けることが可能です。

詳細は <https://www.kpu-m.ac.jp/corporation/kihukinn.html>



ふるさと納税制度を活用した寄附

『世界トップレベルの医学を地域へ』を目指し、ふるさと納税制度を用いた寄附金を募集しています。寄附金は、教育・研究環境の整備や国際交流事業、診療環境の充実等に活用させていただきます。

- クレジットカード、ゆうちょ銀行、郵便局からの払い込み及び銀行等からのお振込
- 詳細は
<https://www.kpu-m.ac.jp/doc/about/furusatonouzei.html>



【お問い合わせ】

〒602-8566
京都市上京区河原町通広小路上ル梶井町465番地
京都府立医科大学 総務課総務係
TEL : 075-251-5210

<https://www.kpu-m.ac.jp/doc/about/kihukin.html>



寄附額に応じて、感謝を込めた顕彰制度をご用意しています。多くの皆様のご寄附をお待ちしております。



京都府立医科大学附属病院と京都大学医学部附属病院が共同で誘致！

ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都

(略称：京都ハウス)



お家から遠く離れた病院に入院・通院している子どもとそのご家族のための「第二のわが家」

2026年
秋頃
開設予定

「ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都」の整備のため、皆様からのあたたかなご寄附をお待ちしております。

ご寄附の方法(ふるさと納税制度適用可)

- ・クレジットカード、ゆうちょ銀行、郵便局からの払い込み及び銀行等からの振り込み
(二次元コードを読み込んでください。)>>>



場 所：京都市上京区御車道通清和院口上る東側梶井町447の一部
建 物 規 模：延べ床面積約1,200㎡(ベッドルーム18室、共有スペース)
利用対象者：京都府立医科大学附属病院、京都大学医学部附属病院等に入院・通院する患児とその家族(1人1,000円/日)
募金目標額：4億円(総費用8億円)



ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都開設募金委員会 <https://kyoto-house.jp/>

〒602-8566京都市上京区河原町通広小路上る梶井町465(京都府立医科大学内) 公益財団法人京都府医学振興会
(TEL: 075-212-5466 E-mail: kyoto-h@koto.kpu-m.ac.jp)